

「しかし、今すぐにはなく」
～アウグスティヌスの『告白』から

奨励	越川 弘英【こしかわ・ひろひで】
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学（礼拝、宣教、牧会）

更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

（ローマの信徒への手紙 13章11―14節）

アウグスティヌスという人

アウグスティヌスは、紀元354年に北アフリカで生まれ、430年に亡くなっています。初期のキリスト教会におけるもっとも重要な指導者のひとりであり、神学者としても現在のカトリック、プロテスタントの双方に大きな影響を残している人物です。

最近、私はアウグスティヌスの書いた神学的自伝といわれる『告白録』という本を読みました。キリスト教文学としては古典的な作品ですが、今から1600年ほど前の人物が、自分の生まれた時から始まって、幼年期、少年期、青年期、そして当時としては壮年にあたる30代前半までの人生の歩みを振り返ってまとめた文書です。古代の書物ということ、またとくにキリスト教を意識して書かれた書物であることなど、一般の方には読みにくいところもありますが、それでもそうした制約というか限界というか、そういうものを越えて現代の私たちに訴えかけてくる内容のある本であるように思いました。

『告白録』という題名は、アウグスティヌスが神に向かって、これまでの自分の生き方を「告白」する、とくに長らく神のもとから遠く離れ去っていた自分の「罪」を「告白」するという意味で付けられたタイトルです。ですから、この本の文章は、終始、アウグスティヌスが神に向かって語りかけるというスタイルで記されています。

そうした「告白」の底流にあるもの、あるいはこの本の真のテーマは、人間は神によって創造された存在であり、それゆえに神のもとに立ち帰る時にはじめて本来の自分自身であることができるという信仰です。しかしまた、そうであるにもかかわらず、なかなかそうした本来の神と人間との関係に立ち帰ろうとしない人間の現実のありさまを、自分自身の経験から描き出し、深く考え、探求した本でもあります。

この本の最初のところで、アウグスティヌスは次のように書いています。

「あなたを讃えることが
喜びであるように、
それは、あなたがわれわれを
あなたに向けて創られたからです、
そのためわれわれの心は
あなたのうちに憩うまでは
安らぎを得ません。」（1―1―1）

「しかし、今すぐにはなく」

今日、この奨励に掲げた「しかし、今すぐにはなく」というタイトルもまた、この『告白』の中に出てくるアウグスティヌスの文章の中から取ったものです。この言葉は、彼が好き勝手な青年時代を過ごしていた時期を振り返っている箇所で、自嘲と反省を込めた叙述の中に出てくる言葉です。少し長くなりますが、そのところを引用してみましょう。

「ところが、わたしは青年時代、まことに惨めで、特に青年期初期には惨めでした。たしかにわたしはあなたから貞潔を祈り求めたことさえありました。ところがわたしは『わたしに貞潔と節制を与えてください、でも今すぐにはありません』と言ったのです。というのは、わたしはあなたがわたしの祈願を直ぐに聞き届け、すぐに肉欲の病からわたしを癒やしてくださるのではないかと、恐れていたからです。わたしは、この病が取り除かれることよりも、むしろ満たされることを望んでいました。」（8―7―17）

率直と言えまったく率直な書き方ですが、つまりアウグスティヌスは、清い真実な生き方を求めながらも、それが今すぐ実現するのではなく、当面は自分の欲望を満たすことをまず第一に望み、神のもとへ立ち帰るのはもっと後のことになるのを自ら欲していたというのです。ここに垣間見ることができるのは、言わば自覚的なモラトリウム人間の姿であると言えるでしょう。

この青年期のことをアウグスティヌス自身、さらに次のように語っています。

「19歳から28歳までの9年間、わたしは様々な情欲のなかで、誘惑されたり、誘惑したり、騙されたり、騙したりして、過ごしました。」（4―1―1）

事実、演劇やスポーツなどに情熱を傾けていたかと思うと、友人仲間での馬鹿騒ぎのようなことも、アウグスティヌスは盛んにやっていたようです。彼はまた18歳の時からある女性と同棲を始め、子どもまでもうけたにもかかわらず、最後には他の女性と正式に結婚するからという理由でこの女性と別れています。

しかしまたそういったことばかりでなく、この時期のアウグスティヌスは精神的な領域においても様々なものに関心を寄せていました。たとえば、彼は19歳の時にキケロの書いた『ホルテンシウス』という真理を追求することの大切さを記した書物を読み、哲学の世界に導かれたと自分で書いています。残念ながら、この『ホルテンシウス』という本は今日にまで伝わっていないので、どのような内容のものだったのかは分かりません。また宗教に関しても、当時、ローマ帝国においてキリスト教と並んで多くの人々を魅了していたマニ教という二元論的な宗教の信徒となっていました。後にアウグスティヌスはこのマニ教に対する批判を展開することになるのですが、彼自身、その内側にいた人ですから、マニ教の何たるかをよく知っていたのです。さらに、ちょっと不思議な気もしますが、アウグスティヌスは占星術にも興味を抱いていました。当時の占星術はたんなる占いというよりも、一種の天文学のような、今で言えば科学的な学問というふうにみられていたようです。彼はこの占星術がキリスト教からは批判されていることを知りながら、一時はずいぶん凝っていたようです。

人間が人間であることを自覚し

よく知られている逸話ですが、アウグスティヌスが16歳だった時、遊び仲間といっしょになって、他人の土地に入り込み、たくさん実のなっていた梨の木を揺らし、その実をすべて叩き落とすといういたずらをしました。この時のことを振り返って、アウグスティヌスは、人が何で悪事を行うのかということを自己分析しています。彼によれば、その時、彼とその仲間は別に梨の実が食べたかったわけではなく、ただ禁じられていることを破るということ、それ自体を楽しむために、そのような悪事を働いたのだと記しています。

「盗みでわたしを楽しませたのは
盗んだものではなく、
盗んだことでした。」（2―9―17）

また彼はこういうことも言っています。

「ところで、わたし一人だけでは
盗みをしなかったでしょう。
（中略）
つまり、わたしはあの場合
盗みを共に働いた人々との
連帯を楽しんだのでした。」（2―8―16）

つまり、悪事はそれ自体に魅力があり、それも友人たちとの付き合いとして行うことに魅力があったというのです。

後年のアウグスティヌスは、人間の意思というものには大きな限界があること、それゆえに人間の救いは神の側からの一方的な恵恩に頼り切るしかないという主旨の神学的主張をするようになりますが、こうした主張の背後には、彼自身が若い頃に経験した、こういった人間の弱さや悪しき傾向をめぐる数々の悪行や失敗が横たわっていたのではないかと思います。

さて、『告白』の中には、こうした様々な経験を積み重ねながら、やがてついに、それまでの生き方に行き詰まったかのような感じで、アウグスティヌスが回心し、神のもとに立ち

帰る歩みが描かれていきます。

その伏線としては、熱心なキリスト教徒だった母のモニカの粘り強い祈りと願いがあり、親友の突然の死と病の床で彼が受けたキリスト教の洗礼をめぐるアウグスティヌスの経験があり、そして劇的なたちで回心を経験し神への信仰に至った同時代のキリスト教徒たちの話を知ったことなど、いろいろな要素が積み重なっていました。しかし、ともあれアウグスティヌスは長い巡礼の旅路を経て、最後に神のもとへ、人間が本来憩うべきところへとたどり着くのです。

今日、お読みいただいたローマの信徒への手紙の一節は、ちょうどアウグスティヌスが劇的な回心を体験したとき、「聖書を手にとって読め」という神の啓示とも言うべき声を聞いて、開いた箇所であったと言います。

「酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。」（13・13—14）

「今すぐにではなく」とアウグスティヌス自身が引き延ばしてきた時が満ち、長年にわたって引き延ばしてきた「その時」が来たのです。アウグスティヌスは神を神とし、その前に生きる人間として歩み始めます。『告白』のその後の部分には、次のような文章が記されています。

「ああ、何といいことでしょうか。

もし人間が人間であることを自ら自覚し、

誇る者は、主〔神〕において誇るならば。」（9—13—34）

人の一生を顧みて

さて、アウグスティヌスの人生を大きく二つに分けると、前半にあたる32歳の時までは今お話ししてきたような放蕩者とも言えるような好き勝手な人生を、そして後半の40年あまりは神に仕え、人々に仕えるキリスト教会の指導者としての人生を歩んだと言えます。

この『告白』という著作はアウグスティヌスが40歳を過ぎてから書かれたものであり、回心してから10年ほどたった後の作品です。そういうことから言うと、すでに北アフリカの教会の有力な指導者となっていた人物が、自分の若い頃を振り返った回心と懺悔の記録であるとは言え、ある意味では、キリスト教徒としての逆説的なサクセスストーリーであるとも言えないわけでもありません。この文書の魅力はアウグスティヌスが自分の内面を赤裸々に描いていることにあるのですが、それすらも、すでに回心を経験し、神のもとで憩うことを得た人間の満足と安心を言い表しているとも理解することも可能です。

しかしまた違う角度から見れば、ここでアウグスティヌスは、彼の人生の前半の歩みを、その後半の歩みから見つめ直しているのだというふうに考えることもできるでしょう。アウグスティヌスはただだんに彼の人生を結果的に美化したり、露悪趣味的な意図を持って教訓的な話の材料にしたりするために、この文書を書いたわけではないはずです。そうではなくて、彼は彼自身の人生を自分なりに理解し意味づけるために、そして過去を現在に結びつけ、さらにこれから先、未来への歩みに結びつけることを願って、この『告白』を書いたのだと思います。

実際、人生の全体を見渡すということはたいへん難しいことです。私たちの人生には最初から決まり切ったコースがあるわけでもなく、決まり切った意味が与えられているわけでもありません。突発的に起こるような悲劇や喜劇のような出来事をランダムに経験することがあるかと思えば、良いと思っていたことから悪しき結果が生じたり、またその反対のことが起こることもあります。

私の人生が良いものであったかどうか、そういった人生の評価というのは、その中の一時期だけ、一部の出来事だけを取り出して行うべきものではありません。そしてまた、「人生には良い時もあれば、悪い時もあるさ」といったふうな、断片的で刹那的な捉え方も人生を正しく理解しているとは言えません。

ひとつの局面だけを見て、人生に絶望したり、人生を甘く見たりすることは間違っています。人生は長く、そして重層的で、その意味するところは自分自身ですらよく分らないほど複雑に入り組んでいます。人生は難しいです。しかしそのような人生を私たちは生きなければならず、そして私たちは自分の人生の意味を探り続けながら生きていかなければならないのです。

アウグスティヌスの場合、神という存在を知り、その超越的な存在によって、自分の人生のすべてが見守られていると信じることによって、自分の人生というものを大きく全体的な視点から捉え直すことができたと言えるかも知れません。もちろん人生における個々の細かい出来事はさておくとしても、自分の人生の背後には、あるいは根底には、恵みと憐れみに富みたまう神がおられ、大きく見れば私はこの方の愛のもとに生かされてきたということに気づくことによって、彼は先ほど引用した深い喜びの言葉を記すに至ったのでしょう。アウグスティヌスの人生の意味、その人生のストーリーの中心には、神がおられるのです。

もちろん誰もがアウグスティヌスのような人生をたどるとは限りません。しかし、誰もが自分の人生を生き、誰もが自分の人生の意味を探り続けなければならないのです。

そうした意味を、人生の価値を、あまりにも早く結論づける必要はありません。またそうすることは間違っているように思います。人生の意味、その全体の意味をほんとうに知るためには、アウグスティヌスが神に願ったのとはまた別の意味で、「しかし、今すぐにではなく」という思いを私たちも自らの心に留めておく必要があるでしょう。

「今すぐにではなく」、しかしいつかやがて時が満ちて、皆さんが自分の人生を大きな全体として、そしてひとつのつながりとして理解し、それが究極的には良いものであった、意味あるものであったというふうに受け入れることができるようになることを、祈り求めたいと思います。そして願わくば、皆さんがそこに神の愛の導きがあったと気づくことができるように、心から祈り求めたいと思います。

〔参考文献〕

宮谷宣史訳『告白録』教文館 2012年

2012年7月25日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録